

玉木俊明著

『海洋帝国興隆史』

——ヨーロッパ・海・近代世界システム——

(講談社選書メチエ)

講談社 二〇一四・一一刊
四六 一五六頁 一六五〇円

近年、日本の西洋史学界では「海」に関わるシンポジウム等の企画が目立つようになってきている。その潮流の中で現れた本書は、近世バルト海経済史研究の第一人者である著者による、経済史と海事史（マリタイム・ヒストリー）の融合の試みである。

著者はまず序章で、ヨーロッパが陸でなく、海を利用して他地域に進出した事実こそ目を向けるべきであると訴える。続く第一章では、ウォーラーステインの「世界システム論」は産業資本主義の論理に偏り海運の意義を軽視していたと指摘し、工業化以前の輸送コストの高かった時代における海運業の重要性を強調する。また、異文化間交易に従事する商人ネットワークの拡大が、商業空間の拡張のみならずヨーロッパの経済成長をももたらしたと主張する。第二章では自然環境の差異も含めて地中海とバルト海とを比較し、十六世紀までヨーロッパの先進地帯であったイタリア都市国家群を擁する前者主導ではなく、海運業が発展した後者の地域により、二つの商業圏が統合されていったと述べる。第三章では視線は西に向けられ、大西洋経済の形成と発展に

ともない大西洋が「ヨーロッパ人の内海」となったことがヨーロッパの経済成長に大きく貢献したことが示される。第四章では対象地域はインド洋や太平洋にまで広がり、東インド会社および私貿易商人の活動によりヨーロッパと南アジア、東アジアの貿易が統合されていく過程が描かれる。第五章では、イギリスが十九世紀初頭までにヨーロッパのヘゲモニーを握った背景には、中央集権的財政金融システムのみならず、国家が関与しての海運業の育成や、アメリカでの綿花栽培の成功も重要であったことが指摘される。さらに十九世紀になって、蒸気船航路の拡張、電信の発達やそれに伴う商業・金融・軍事情報の掌握により、イギリスがグローバル化した世界における政治的経済的秩序のゲームのルールを設定する「構造的権力」となっていったことが示される。

ウォーラーステインの問題意識を踏まえつつも、そこに海事史の視点を加味し、またヨーロッパ各国の最新の研究成果を批判的に吸収して、海と経済活動を軸とするグローバルな歴史像を描いた本書は、ヨーロッパ諸国の研究者と活発に交流し精力的に活動する著者の、まさに本領発揮といった作品である。ここで重要な論点を全て取り上げる紙幅の余裕はないが、近世のポルトガル海洋帝国とその商人が果たした役割や十八世紀の大西洋経済における中南米地域との貿易の重要性など、本書は日本の西洋史研究ではこれまで必ずしも十分には検討されてこなかった様々な点を指摘しており、大変刺激的である。一方、論点が多岐に渡ることや一部内容の重複などにより、全体の論旨がやや分かりにくくなっているのも事実である。また、長期かつ広範囲を扱う著作に生じ

がちな細部での事実誤認等を取りあげて批判することは容易である。しかしより生産的なのは、本書で提示された様々な議論を正面から受け止め、それを実証的かつ批判的に検証し、展開させていくことであろう。

(薩摩真介)